

令和 6（2024）年度

教職課程

自己点検・評価報告書

（評価対象年度 令和 5・6 年度）

学校法人九里学園
浦 和 大 学

令和 7（2025）年 3 月

浦和大学における教職課程自己点検・評価報告書の構成及び様式は、『「教職課程自己点検・評価報告書」作成の手引き（令和6年度版）』（一般社団法人 全国私立大学教職課程協会）を参照して設定した。

浦和大学 教職課程認定学部・学科一覧

- ・ こども学部（こども学科、学校教育学科）
- ・ 社会学部（現代社会学科）

大学としての全体評価

浦和大学では、隔年で教職課程自己点検・評価を実施し、その報告書の作成と公表を行っている。

学校法人九里学園は「実学に勤め徳を養う」を校訓として、2003年に浦和大学を開学した。こども学部にはこども学科と学校教育学科、社会学部に総合福祉学科と現代社会学科の2学部4学科を設置し、現在、総合福祉学科を除く3学科に教職課程を設けている。

こども学科では豊かな幼児教育を担うことを目的として幼稚園教諭一種免許状、学校教育学科では人間理解に根差す初等教育を担うことを目的として小学校教諭一種免許状、現代社会学科では急速に変化する社会で中等教育を担うことを目的として中学校教諭一種免許状（社会）・高等学校教諭一種免許状（公民）取得を目指して、約20年間に段階的に教職課程の拡充を進めてきた。

いずれの学科においても実学教育を通じた人間形成を目指す校訓を実現できるよう、体験を通じて感得していく実践的な教職課程教育に努めている。

教員組織においては、研究を基盤とする教員と豊富な実務経験を有する教員とを適切に配置し、学生と教員の人格的触れ合いが可能な少人数教育を徹底し、丁寧な個別指導を特色としている。

教職課程教育に資する施設設備としては、教育実践に役立つ模擬教室や保育実習室、豊かな教科教育に結びつく音楽、理科、家庭科等の特別教室、近年急速に必要性が増しているICT教育の設備を自然に恵まれたキャンパス内に整えている。

3学科横断的な教職課程運営を行うため、教職課程を支える組織である教員養成協議会を設置して、教職課程に共通に必要な事項の連絡調整、教職課程に有効な教育企画、自己点検・評価報告等に関する各種協議を行って、共通理解を深めている。

また、教育委員会や実習先との連携の下で教職課程を充実させるための拡大教員養成協議会

を実施し、協力関係の構築や教育の質の向上についての意見交換等を行っている。

事務組織にこどもコミュニティセンターを設置し、教務課等との連携の下、学内外の実習・演習に関する教育上の支援や教育実習先との連絡調整、上記、教員養成協議会の事務局、自己点検・評価報告書の編集等の事務・業務を担っている。

今回の自己点検・評価の結果を踏まえ、学校教育法に基づく自己点検・評価の取り組みも踏まえながら、教職課程教育の一層の充実と発展を目指すものである。

浦和大学

学 長

久田 有

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検・評価	4
	基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	4
	基準項目 1－1 教職課程教育の目的・目標の共有	4
	基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫	8
	基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援	13
	基準項目 2－1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成	13
	基準項目 2－2 教職へのキャリア支援	17
	基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム	21
	基準項目 3－1 教職課程カリキュラムの編成・実施	21
	基準項目 3－2 実践的指導力育成と地域との連携	26
III	総合評価	30
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成プロセス	32

I 教職課程の現況及び特色

1 教職課程の現況

- (1) 大学名：浦和大学
 (2) 学部名：こども学部・社会学部
 (3) 所在地：埼玉県さいたま市緑区大崎 3551 番地
 (4) 教職課程の履修者数及び教員数

① 教職課程の履修者数

令和6年度（令和6年5月1日現在）

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
こども	学校教育	全科	小学校1種	18	16	18	20	72
		幼稚園	幼稚園1種		1	4	4	9
			幼稚園2種					
		社会	中学校1種			1	3	4
			中学校2種					
	こども	幼稚園	幼稚園1種	49	44	67	41	201
社会	現代社会	社会	中学校1種		7	6	11	24
			高校1種(公民)		7	6	11	24

② 教員数

	教授	准教授	講師	助教	非常勤講師
幼稚園1種	7	5	3	1	17
小学校1種	11	2	1	0	19
中学校1種	10	4	0	0	21
高校1種	9	4	0	0	16
備考：					

(5) 卒業者の現況

令和5年度卒業生（令和6年5月1日現在）

教科	免許種	就職先状況											
		認定こども園		幼稚園		小学校		中学校		高等学校		特別支援学校	
		正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他
	小学校					9	9						
	幼稚園	2		5									
社会	中学						1						
	高校 (公民)												

2 特色

【こども学部学校教育学科】

学校教育学科では、3ポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を設定し、その実現に向けて取り組んでいる。特に、初等教育に携わる教員として、こどもの成長と発達、表現と創造性についての総合的な理解に基づいた今日的かつ地域的な学校教育の課題に適切に対応できる実践的指導力の獲得を目指している。さらに「ひとを大切にし、こどもと学生がともどもに伸びる」を理念とし、教育活動に当たっている。

学科の特徴として、徹底的な少人数指導があげられる。アドバイザー制により学生の指導に当たっており、特に3年生からのゼミ指導では、教員1名当たり3～5名の個別指導を実施している。ここでは、卒業研究指導のほか、教育実習指導、教員採用に向けた指導・助言、生活指導・相談等、多岐にわたり学生一人ひとりに寄り添った指導を行っている。

また、1年次より児童との関わりを重視しており、さいたま市教育委員会と連携して、近隣及び市内の小学校への教育インターンシップ（チャレンジスクール、アシスタントティーチャー）を計画的に実施している。この経験が3年生で実施する教育実習に大いに役立っている。

【こども学部こども学科】

こども学科では、優れた幼稚園教諭を養成するため、第1に、こどもに関する専門的知識を修得すること、第2に、こどもの最善の利益を尊重する視点やこどもの表現を感受できる自由な心を有し、こどもたちとの信頼関係を育む態度を形成すること、第3に、こどもの文化の基礎的知識や幼児教育、保育の実践に役立つ技能・技術を修得すること、そして第4に、家族・地域社会・現代社会との関係でこどもを理解する視点に立って地域社会の創造に寄与できることをディプロマ・ポリシーに掲げている。この目的を達成するため、少人数での指導を徹底し、保育内容や指導法の学びに加えて、こどもの表現や児童文化に関する学び、こどもの権利や家族・地域支援に関する授業科目を充実させている。また、親子のひろば「ぽっけ」¹を学内に開設し、保育技能、こどもと保護者への支援の実践的学びができるよう環境を整えることにより、複雑化する現代のこどもをめぐる諸課題に対応できる人材の養成を目指している。

【社会学部現代社会学科】

現代社会学科は、2020年度に開設され「社会学の基礎理論と方法を修得することにより、急速に変化する現代社会の諸課題とその背景及び構造を把握する社会学的想像力を養い、社

¹ 学内の「保育実習室」で定期的に行われる親子のひろば「ぽっけ」は、地域の親子（3歳未満児と保護者）が訪れて専門スタッフ（保育士等）や学生、教職員と共に歌や絵本、自由遊びなどの活動を行っている。学生が、親子の育ちの支援、保育についての体験的な学びを深めることを目的として開室している。こども学部の設置（2007年）に際し、地域と連携した教育を目指して学内に開設して今日まで学生教育の場として継続している。

会的存在としての人間の幸福を考究し、他者との協働において解決方法を提案、実践する能力を具えた人材を養成すること」を学科の目的としている。

現代社会学科における教職課程の特色は、この学科の目的を踏まえ、現代社会の諸課題を直視し、メディア等からの情報を無批判に受け入れることなく、客観的に判断できる学生を育て、そこで培った力を社会科・公民科教育の中で発揮できる教員を養成することにある。その実現のため、第1に、教科に関する専門的知識と教科指導の実践力を有する教員養成、第2に、社会科・公民科に関する知識・理論を多様な角度から学ぶ専門課程を生かした教職課程、第3に、浦和実業学園中学校・高等学校(併設校)やさいたま市及び近隣市の中学校と連携して教員養成に臨んでいる。

<根拠となる資料・データ等>

【こども学部学校教育学科】

資料2：大学案内 2025

資料3：浦和大学の3つのポリシー（大学 HP）

【こども学部こども学科】

資料2：大学案内 2025

資料3：浦和大学の3つのポリシー（大学 HP）

【社会学部現代社会学科】

資料3：浦和大学の3つのポリシー（大学 HP）

Ⅱ 基準領域ごとの教職課程自己点検・評価

基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1－1 教職課程教育の目的・目標の共有

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

学校教育学科では、ディプロマ・ポリシーで4つの方針、カリキュラム・ポリシーで8つの方針を定め、学士課程教育プログラムと有機的なつながりをもつ教員養成カリキュラムを基盤として学位を授与し、現代社会が提起する教育諸課題に最新の知識・技能をもって関わることで教員を養成することを目的としている。これらの方針については、毎学期のオリエンテーション等様々な機会に学生に周知するよう努めている。また、STUDENT HANDBOOK に履修モデルを明示し、履修の計画性・系統性に配慮し、周知と共有を図っている。

将来教壇に立つことを想定し、1年次より近隣の小学校に出向き放課後や土曜日の学習や生活を支援する「教育インターンシップ」（チャレンジスクール）、2年次からはさいたま市や埼玉県等の教育委員会と連携しアシスタントティーチャーの活動をするなど、実践的に学べるよう配慮をしている。教育現場でのインターンシップと理論学習を繰り返す、往還的な学習を通して、教職の専門性と実践的指導力を形成し、地域社会の教育活動に貢献している。学修成果について、計画的に振り返りを実施したり、教職履修カルテを作成したりすることにより、学生自身が可視化できるように工夫している。

〔優れた取組〕

より実践的に、より広く深くこどもと関わることが、本学科の大きな特徴である。チャレンジスクールでは、近隣の小学校3校に1年次生全員をグループに分け配属し、児童の放課後や土曜日の学習・遊びの支援をしている。ここでは、こどもと関わることに加え、地域スタッフと協働し運営に当たっている。児童理解や危機管理・リスクマネジメントを体験できることは将来の教育現場で有効である。

また、小学校模擬教室を学内に設置し、教科指導法を中心に活用している。模擬教室には、児童が用いる机椅子、昇降型黒板、電子黒板、タブレット型PC、児童用ロッカー、ランドセル、清掃用具等がおかれ、教師としての視点、児童目線の体験ができるように配慮されている。教科指導法では板書計画や教材・掲示物の提示の仕方が学習できるほか、教室備品の適切な使用方法、豊かな心を育む掲示物作成など、実践的な学習を継続して行っている。

2022年度の教職課程自己点検・評価の報告以降、進められている「GIGA スクール構想」に迅速かつ適切に対応することが急務な中、教科指導法を通して実際に小学校教師として通用する情報機器の操作技能を身に付け、スキルアップのために、特に次の4点に重点的に取り組んでいる。

①15台のタブレット型PCを模擬教室に配し、さいたま市内の小学校において導入されている協働学習・授業支援ソフト「ミライシード」やコミュニケーションソフト「Canva」の

操作を学んでいる。

②改訂されたデジタル教科書の導入や ICT 機器を用いた授業の実施に向けた教育条件整備に継続して取り組んでいる。

③加えて、教科指導法担当教員による ICT 機器の利用促進のための教員研修を実施した。また、近隣小学校と連携し、ICT 機器を利用した実践例などの情報収集・分析・共有に取り組んでいる。

④教職希望学生増加に関わる諸課題と今後の取り組みについて関係自治体の小学校長と協議し、情報共有に取り組んでいる。具体的には大学での指導や小学校現場での研修の在り方を話し合い、改善策を協議した。

〔改善の方向性・課題〕

今後、教職履修カルテを活用し、教職実践演習において学修成果に関する評価規準を設けていくことが課題である。現在、さいたま市や埼玉県をはじめとする近隣自治体による教員育成指標の収集・分析に取り組んでいる。各自治体が教員育成指標の改訂作業を進める中、教員育成指標の改訂の動向を情報収集するなど、さいたま市や埼玉県における教員の養成・採用・研修に向けて協力・連携体制の構築に努めていく。

【こども学部こども学科】

〔現状〕

こども学科では、「実学に勤め徳を養う」との校訓すなわち、「実学教育をもって人間形成をはかる」という営みを大切に、「豊かな保育を構想し実践できる人材の養成」を目指している。そのため、教育課程においては、「地域社会と連携した子育てを実践する人材の養成」「乳児からの発達と学びを支援できる人材の養成」「専門職としての資質を備えた人材の育成」を目的・目標としている。これらは、こども学科の3ポリシーに示され、学生、教職員に周知されている。

教職課程教育については、履修モデル、履修系統図を提示して系統性、計画性を踏まえた履修指導を行い、教職履修カルテを用いて年次ごとに振り返り、学生と教員との間で学修成果についての共有に役立てている。

また、本学科のカリキュラムツリーは、カリキュラム・ポリシーに基づき科目群別に整理されているが、さらに、ディプロマ・ポリシーとの繋がりや科目間、科目群間の関連性を明示することにより、4年間を通した学びの過程や目標達成への筋道のイメージが共有されるように、2023 年度にカリキュラムツリー作成部会を組織し、履修系統図の見直しを行っているところである。

〔優れた取組〕

こども学科では、教員がきめ細かく関わる中で、教職課程教育の目標、幼稚園教諭、保育者として求められる資質等について教員同士が考えを共有するとともに、学びの系統性、計画性を踏まえての履修指導、学修成果の振り返りが可能となっている。学内に設けられた親子のひろば「ぽっけ」での学びを通して、本学科の教員養成の目標である「家族、地域社会、

そして現代社会との関係で、こどもを理解する視点」をもち「地域社会と連携した乳幼児教育」を実践できる人材の育成に努めている。また月1回開催する学科の教育実習に関する会議には、直接実習指導に携わっていない教員も含め、専任教員全員と実務担当職員も参加することにより、実習をはじめ教職課程教育の目的・目標に関する教職員間の共有を図っている。

〔改善の方向性・課題〕

学生に科目間の関連性が伝わるような教育課程の提示や主体的な履修を促すための履修指導を行うためにも、カリキュラムツリーや教職履修カルテの見直しと改善を継続する。それと同時に、初年度の履修指導についても、伝えるべきポイントと内容を見直し、学科で共有していく。初年度の必修科目であり、大学教育を受けるための基礎力を養う科目として「スタディナビゲーションA」「スタディナビゲーションB」がある。2025年度からのカリキュラム改訂の中で、これまで学科ごとに開設されていた人間総合科目（いわゆる教養科目）が全学共通科目になる。この機会に、学科独自の学びの中に、学生がカリキュラムの流れや意味を理解し、4年間の学びを見通して履修していけるような指導の在り方や内容を構築していく。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

校訓である「実学に勤め徳を養う」をはじめ、学則及び学科の3ポリシー、特に「大学での学修を通じて修得した課題発見から解決に向けた能力を、いかなる場にあっても、より良き社会の創造に関与することに活用する価値意識を有し、校訓を体现できること」（ディプロマ・ポリシー）等に則して、人に寄り添い人を支え、地域に根差し地域と連携しながら共に学ぶ教育を展開できる実践力ある教員養成を目指している。

この理念を実現するため、教職課程では、社会性や協調性を育み、地域に開かれた学校教育活動を推進し、実践的指導力を養うことができる十分なサポート体制を整えた教員養成に取り組んでいる。この理念と目標を専任教員全員で共有し、教職課程のカリキュラム編成について共通理解のうえ、前期・後期の学期始めに行うオリエンテーション時に、学生に周知している。

〔優れた取組〕

学科専任教員全体で教職課程の目的や目標を共有し、協働体制のもと教職課程を履修する学生の支援に当たっている。定期的に行われる学科会議において、教職担当教員が履修学生個々の履修状況を報告し、学科全体で課題を共有し、課題解決について協議を重ねている。

さらに、学期ごとの成績評価後に現代社会学科教育実習運営協議会を開催し、学科長、教職担当教員、関係事務局職員が出席し、教職課程を履修している学生の学修状況を把握し、一人ひとりの学生の課題を共有して学生への支援に活かすとともに、教育実習等学外実習の円滑な実施に努めている。

〔改善の方向性・課題〕

現代社会学科の教職課程は、学科開設5年目となり、2024年3月には、第一期卒業生のうち免許状取得者4名、教職に就いた者1名の実績を出した。現状では、教職課程の目的や目標を学科教員全体で共有した上で、特に教職を目指す学生が学科の専門科目と教職科目を系統的に履修できるように、授業科目の配置について検討している。

2025年度からは、1年次に「教職入門」を配当することによって、教育実習までに教職科目の学習にゆとりをもって取り組むことができるようにする予定である。

また3年次配当の「教育実習」等実践的指導力の修得を目指す授業科目においては、主として研究を基盤とする教員と実務経験を有する教員及び職員とが連携を取る協働体制を構築し、学生の主体的な学びを一層充実させることによって免許状を取得するだけでなくその後の採用試験を経て、学校で意欲をもって取り組む実践力ある教師を養成して円滑に教育現場に送り出すことを目指している。

＜根拠となる資料・データ等＞

【こども学部学校教育学科】

- 資料1 : STUDENT HANDBOOK 2024年度
- 資料2 : 大学案内 2025
- 資料3 : 浦和大学の3つのポリシー（大学HP）
- 資料4－1 : 学校教育学科教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）
- 資料5－1 : 学校教育学科シラバス（教職課程に関わる授業科目）

【こども学部こども学科】

- 資料1 : STUDENT HANDBOOK 2024年度
- 資料2 : 大学案内 2025
- 資料3 : 浦和大学の3つのポリシー（大学HP）
- 資料4－2 : こども学科教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

【社会学部現代社会学科】

- 資料1 : STUDENT HANDBOOK 2024年度
- 資料2 : 大学案内 2025
- 資料3 : 浦和大学の3つのポリシー（大学HP）
- 資料4－3 : 現代社会学科（中免・高免）教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

【教職課程の組織的運営について（3 学科共通）】

浦和大学では、建学の精神に基づき、大学としての教員養成の目標及び各学科における教員養成の目標、目標を達成するための計画を策定している。この目標達成のために関係法令に則って教職課程を編成し、教員を配置している。

教職課程の運営については、全学的な観点からの教職課程の運営、教職課程の質の向上を目的として教員養成協議会²を設置している。ここでは、学部・学科及び関係の委員会、部署と連携しながら、教職課程に関わる全学事項、教育実習、教育インターンシップ、介護等体験等に関わる事項、教職課程の自己点検・評価に関する事項その他について協議し、教職課程の実施に具体化されている。さらに、拡大教員養成協議会³を毎年1回開催し、教育委員会等外部の関係者の意見を反映した教職課程運営に努めている。

また、学部教育の充実・支援、地域の子育て・家族支援を担う組織としてこどもコミュニティセンター⁴を設置している。センターでは、学外実習、介護等体験、体験的学習やボランティア等のサポート、親子のひろば「ぽっけ」の運営、教員養成協議会の事務等を担当している。さらに教職支援に関わる学習サポート、教員採用に関わる情報収集、教材の提供等を行っている。

ICT 教育環境の整備については、スーパーメディア教室において、ICT 機器を活用した授業を行えるようにするとともに、模擬教室においても電子黒板、タブレット PC 等を準備し、授業に活用できるようにしている。

教職課程の質の向上については、2022 年度に実施した教職課程自己点検・評価の結果から明らかにされた課題の解決を目指して、各学科におけるきめ細かな学習支援、進路実現を目指した支援が進められてきた。

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

専任教員を中心に、教育の基礎的理解、各教科等に関する専門的事項や指導法、情報機器の操作などの指導に関わっている。学生の履修状況や履修内容等について、毎月の学科会議において、専任教員間での情報共有ができるようにしている。

² ³ 本学では教職課程を設置する学科を対象とする横断的組織として教員養成協議会を設け、教職課程に関わる全般的事項や教育実習、介護等体験に関する事項を協議している。また、外部の関係機関等との連携によって教職課程の教育を充実、向上させることを目的として、教育委員会や実習先等、関係機関を交えた「拡大教員養成協議会」を年に1回開催し、教職課程に関する講演と免許種ごとの意見交換の場を設けている。

⁴ 教職課程を設置する学科で実施される学内外の演習・実習教育の効果を高めるための支援を目的として設置している。特に、教育実習や教育インターンシップ等に関しては、実習先と教員や学生との連絡調整、実習に必要な業務など幅広い業務を行っている。また、教職課程に必要とされる教材や教具を備えたオープンスペースを設けており、教員との面談や指導に活用されている。教員採用に関する情報提供や教職サポートセミナーに関する支援業務、教員養成協議会の事務局も担当するなど、学部横断的な教職課程支援の組織として機能している。

また、非常勤講師や他学科教員による講義における学生の履修状況や学修への取組状況等についての情報は、学科長に集約される体制になっている。

こどもコミュニティセンターにおいて、教育実習や教職に係る演習、教育インターンシップ、介護等体験の支援に関する業務を中心に、教職課程に関する支援体制を引き続き充実させている。特別招聘講師によるキャリアサポート支援として、主に教員採用試験対策をねらいとした教職サポートセミナーを全学年対象に毎週計画的に実施している。

さらに、学内に小学校で使用する器具等を備えた理科室、調理実習室、被服関係の教材を備えた家政実習室、実際の小学校の教室を再現した模擬教室、ICT 端末を整備したメディア教室等を配置し、教材研究や教科指導法の充実に引き続き努めている。

〔優れた取組〕

専任教員やこどもコミュニティセンター職員間で、報告・連絡・相談を迅速できめ細やかに行っていることが大きな特色としてあげられる。毎月の学科会議では、ゼミ担当教員による学生状況の報告を実施している。そこでは、学生の教職に対しての不安、教師や児童との関わり方を心配する様子について情報共有するとともに、その解消に向けた具体的な方策を話し合っている。それをもとに、「スタディナビゲーション」やゼミで迅速に対応できることは、学生の不安解消に大きく役立っている。

毎月の実習会議では、こどもコミュニティセンター職員を交え、教育実習や教育インターンシップ、介護等体験などの進捗状況を確認することにより、それに係る事務手続きを確実にしている。

また、教職課程の核でもある教育実習に向けて、学生による事前模擬授業を実施しており、その学習指導案作成及び事後指導を全担当教員がきめ細かく行っているのも特色である。

さらに、教育実習や教育インターンシップにおけるトラブルについての具体的対応策や留意点に関するフローチャートを作成した。これにより円滑な実習と様々な状況に迅速に対応できる組織体制をさらに充実させている点も小学校から高い評価を受けている。

〔改善の方向性・課題〕

学生に関する情報交換に関しては、日常的・定期的・臨時的な実施を継続している。また、進路相談や生活指導、履修に関する相談や友人関係、卒業研究関係など、多岐にわたって相談に当たっており、情報共有のための時間も多くなっている。特に定期的に実施する学科会議において学生の状況について意見交換を行っている。学校教育学科の特色である一人ひとりに寄り添う相談や指導に努めているが、限られた時間の中で効率的な情報共有が課題である。

2023 年度以降 ICT 機器やメール機能などを活用することにより、教員間の効率的な情報共有に努めている。OS の更新やセキュリティ対策の強化に留意し、さらなる効率的な情報共有を推進していく。

【こども学部こども学科】

〔現状〕

こども学科では教職課程認定基準等を踏まえた教員を配置し、特に保育内容の指導法及び教育実践に関する授業科目については実務経験を有する教員を配置し、専門的知識とともに実践的な技能を身に付けて乳幼児教育の現場に寄与できる人材の養成を行っている。2023年度からの取り組みとしては、保育内容関連科目担当教員による配当学年や実習時期を踏まえた教授内容の確認と整理について協議を行い、カリキュラムツリーや教職履修カルテの改正にも活かしている。

また、1年次から親子のひろば「ぽっけ」での参加や「フィールド体験」を必修で行い、実際にこどもと関わる体験的学修を充実させている。授業以外で親子のひろば「ぽっけ」に自主的に参加する動機づけの1つとして、「ぽっけ」への参加回数を記録するシール帳を作成し、学生が負担感を感じることなく記載できるよう記録の書式を改良した。また、実習指導の中では、学内の先輩の話聞く機会を設け、実習で体験するやりがいや魅力について、より理解を深めイメージをもって意欲的に取り組めるようにするなど、学科内の保育内容関連教員、「ぽっけ」に関わる教職員、実習担当教員が教職教育の目標を共有し、協働して関わっている。

〔優れた取組〕

こども学科の教育は、こどもコミュニティセンターとの協働、連携に支えられ、学生の学び、利便に効果をあげている。こどもコミュニティセンターには専門職員が配置され、幼稚園教育実習に関する、幼稚園との連絡調整、委託文書や実習の手引きの編集・発行、実習費や実習事故補償保険に関すること等の実務全般を担い、教員と協働し、教職課程の教育を支えている。学生にとっては力強い存在であり、充実した実習教育の円滑な実施を可能としている。

また、ピアノを不安要素とする学生も少なからず見受けられるところから、2023年度、ピアノ担当教員全員の協力のもと、幼稚園教育実習に向けて、基本的な曲の修得について常時アドバイスを受けられるようにオンラインを活用した学科独自の取り組みを試験的に運用している。それにより学生がピアノに前向きに取り組む、技量が向上しているという感触を得ている。

〔改善の方向性・課題〕

こども学科の教職課程教育については、実習先である乳幼児教育の現場（幼稚園、認定こども園）との連携・協力、こどもコミュニティセンター、教務課、全学組織である教員養成協議会等の支援体制のもとで取り組みを進めている。1年次からの「フィールド体験」の実施や親子のひろば「ぽっけ」での地域の乳幼児親子との関わりなど実際に現場を見学したり、体験したりする機会を設けている。

今後は、幼稚園教諭として働いている卒業生の体験を聞く機会を積極的に増やし、現場の仕事の楽しさをイメージできるよう工夫を重ねていく。

また、試験的に取り入れたピアノ指導の取り組みの改善と定着を図っていく。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

現代社会学科では、学士課程の専門性と教職課程の専門性をバランスよく修得できるように授業科目を配置している。履修年次の段階に合わせて、研究を基盤とする教員と実務経験を有する教員及び大学職員との協働体制を構築している。

1年次には、現代社会学科卒業必修単位を中心に基礎的な知識の修得を目指し、社会科・公民科に対応する授業科目を配置している。1年次後期には、教育学全般の基礎理論を修得するため「教育学概論」等を配置した。

2年次以降の教職科目では、段階的に実践的科目へとシフトできるよう、教科指導法等の実践的指導力の育成に努めている。併せて特別招聘講師を配置して教職サポートセミナーを実施している。2年次後期には、実際に学校体験活動を行うことによって、3年次の教育実習に向け準備段階として実践性を高める教育を進めている。こうした学外活動や、実習、介護等体験については、全学的組織であるこどもコミュニティセンターの職員と連携・任務分担して、学生が円滑に実習に取り組めるように支援を進めている。4年次後期の「教職実践演習」では、学生が実際に教育現場で教員として活躍できるよう、教職教育のまとめとして、教職・教科教育の担当教員が指導している。

〔優れた取組〕

教職課程の運営には学科専任教員全員が協力して臨む体制をとっている。教職課程の課題及び教職課程を履修している学生の学修状況については、学科会議及び教育実習運営協議会で情報共有を重ねながら実態を把握し、学生の学修をサポートしている。学外実習等については、こどもコミュニティセンターと連携し学生を円滑に実習に送り出す仕組みを整えている。さらに、拡大教員養成協議会を通じて、さいたま市や近隣市を中心に地域との連携を進めている。このように開設5年目にして、教職課程の諸活動を学科内から全学組織へ、さらに学外の地域連携へと広げ、教職課程の組織的体制を整えている。

〔改善の方向性・課題〕

社会科・公民科に係る基礎知識の修得の観点を踏まえた厚みのある系統的な授業を学科全体で展開できるように、教員間の共通理解と連携強化を図る。2023年度には、学科の履修モデルの1つとして教員免許モデルを学科内で検討し、2024年度 STUDENT HANDBOOK には、教員免許モデルを掲載した。学科のカリキュラム・ポリシーに則って、教職科目の配置を見直し、2025年度より実施する予定である。教職課程を履修する学生一人ひとりを専任教員全体で把握し、教職を目指す学生としての成長を支援するとともに、学生の教育実習や学外活動を進めていく。

また、教員養成を軸とする他学科(学校教育学科)で開講されている授業科目についても、社会科・公民科の教員免許状取得に有効かつ学びを充実させる上で履修可能かどうかを検討するなど、他学科との連携・協力を進める。

＜根拠となる資料・データ等＞

【こども学部学校教育学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

資料 5－1 : 学校教育学科シラバス（教職課程に関わる授業科目）「教育実習指導」

【こども学部こども学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

【社会学部現代社会学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目 2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

大学案内や学生募集要項に示している求める学生像（アドミッション・ポリシー）にも述べている「初等教育の実践者になろうとする強い意志を持ち、主体的に学ぶことのできる人」を観点として選考している。このような教育実践者の育成を目指し、各科目の履修年度を決めている。これらの履修がより有意義で学生一人ひとりの育成を効果的なものにするため、学科定員を適切な規模に設定している。その結果、教職への就職率は高くなっている。開設 8 年目という歴史も浅い学科ではあるが、入学する学生の教職に関する興味関心や意欲が高い状況である。

入学定員の確保が急務な中、本学科ではオープンキャンパスの充実を図り、学科の魅力を理解してもらい入学生確保に努めている。毎年のオープンキャンパスにおいて、教員と高校生との個別面談における丁寧な説明をはじめ、スライドによる学科説明、教員による体験授業、学生による学生生活の説明や学内ツアーを中心に、他大学にない本学科の魅力をしっかりと参加者に感じてもらうことに尽力し、趣旨に合う学生を受け入れている。入学後は、「スタディナビゲーション」で学生個々の強みを把握し、教職に向けた学修に取り組むよう計画的な指導を行っている。

〔優れた取組〕

入学直後から、計画的に児童に関わることをねらいとして、教育インターンシップを中心に活動を実施している。

1 年次ではチャレンジスクールを必修活動として近隣の小学校と連携を図り、放課後と土曜日に児童の学習と遊びの活動支援を行っている。児童は、大学生ということから親しみを持ち関わっており、本学科生も学習支援や一緒に体を動かすことで児童の実態が把握できるという長所がある。

また、2 年次より行っているさいたま市や埼玉県とのコラボ事業であるアシスタントティーチャーでは、毎週活動校の教室に入り、担任の授業や教育活動の補助をしている。小学校教師として必要とされる専門的知識、多様な技能・技術を身に付け、実践できるよう児童との活動を通して、大学で学んだことを試したり活動を通して不明な点を大学の授業で解消したりするなど、理論と実践の結び付けができている。また、学校について早い時期に知ることができ、教師の動きや教育活動の実際を、年間を通して学ぶことができる。この活動が、3 年次での教育実習に生かされるとともに、早い時期から教師の魅力を感じ、教職を担おうという意識を高めることにつながっている。

〔改善の方向性・課題〕

教職を希望する学生は、ほぼ全員が教職に従事するという高い就職率を維持しており、小学校現場での本学卒業生の評価は依然として高い。教職就職数を維持・増加するために、教

員採用試験受験学生および教職就職学生に対する奨励金制度の情報提供や活用を引き続き進めていく。

今後、オープンキャンパスや高校訪問を通じて広く本学科の特徴を知ってもらい、多くの高校生を入学に結び付けることが重要である。そのため、ホームページや学校教育学科パンフレットでの本学科の紹介、オープンキャンパスでの在学生との関わりを厚くするなど、さらなる充実を通して広く高校教員や高校生に認知してもらうことや、教員採用試験対策に特化した教職サポートセミナーへの出席率を向上させ教員採用試験の合格者数を増やし、学校現場で活躍する人材を多く輩出することにより信用と実績を積んでいくことが課題である。また、本学科認知度向上のため関係部署と連携して塾や予備校等への広報も積極的に進めていく。

【こども学部 こども学科】

〔現状〕

大学案内、学生募集要項において幼稚園教諭一種免許状等取得できる免許・資格を明記するとともに、教職課程で学び幼稚園教諭となる学生であることを想定し、学科のアドミッション・ポリシーとして「求める学生像」を示し、オープンキャンパスでの学科説明や個別相談、入学前セミナーにおいて説明している。

オープンキャンパスでは、幼児教育にとどまらず幅広い知識・理解や汎用的技能などを修得したいと考える高校生に向け、「多様性ブース」を設けている。この「多様性ブース」では心理学、美術、音楽、ダンス、IT、児童文化等、個々の興味・関心に応じて学びを深められることをアピールしている。

また、2023 年度からは総合型選抜体験会においてピアノ特技型授業体験会を実施している。高校で芸術コースを専攻している、あるいは幼少期よりピアノを習い得意とする高校生に、将来の職業として、幼児教育の場で音楽的素養を発揮し活かしていく道があることを提示し、総合型選抜の入試にピアノ特技型を加えることにより出願につなげている。

入学後は各期オリエンテーションや「スタディナビゲーション」の授業において教職課程の科目一覧(教員免許状取得のための履修単位チェック表)等を用いて教職課程カリキュラム全体の構成や各科目の位置づけ、趣旨等の説明、履修指導を行っている。また各期末には自身の学びを振り返り次学期につなげるため、教職履修カルテの記入、クラスアドバイザーとの面談を行い、幼稚園教諭としての資質・能力修得に向けて継続的な学修を支援している。

〔優れた取組〕

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに示された乳幼児教育に携わる者として卒業までに身に付けることが望まれる資質・能力、そしてそれを達成するための具体的な教育課程の編成や履修の進め方等について、アドバイザー教員が、「スタディナビゲーション」の授業やゼミ、個別指導を通して指導する体制をとっている。また保育内容の指導法、幼稚園教育実習指導、教職実践演習等の授業科目においては、幼稚園教諭としての実務経験を有する教員を中心に、理論と実践の融合を意識した幼稚園教諭の育成に努め、就職後の教育実践へとつなげている。

これまで本学科には「こどもが好き」「こどもとかかわる仕事がしたい」という理由で入学してくる学生がほとんどであったが、「ピアノが好き」「ピアノを活かしたい」「音楽とかかわる仕事がしたい」という高校生にも、その1つの場として幼児教育の場があることを示し、教職を担うべき適切な学生の確保に努めている。

〔改善の方向性・課題〕

本学科では4年間の学修期間のうち、1年次から「フィールド体験」の授業や学内の親子のひろば「ぽっけ」への参加経験、「スタディナビゲーション」の授業での一人ひとりの学生の履修状況の指導や教職履修カルテの活用を通じて、幼稚園教諭として適性のある学生の育成に努めているが、近年の入学生の多様化に伴い、入学当初の幼稚園教諭免許状の取得という希望を叶えられない学生も見受けられる。

教職課程が求める学生像についてオープンキャンパス等において更なる周知を進めるとともに、入学後は幼児教育に携わる者としての適性をいかに引き出し強化していくか、教育の工夫が課題となっている。

一方、入学者の確保が課題となる中で、幼児教育を将来の職業選択の1つに考える高校生の裾野を広げることも課題である。音楽、美術、体育等に関心をもち得意とする高校生に、自分の得意なことを活かしながら乳幼児の成長・発達の支援に当たることができる幼児教育の魅力を伝え、教職を目指す学生の確保に努める。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

アドミッション・ポリシーを踏まえて募集活動を行い、志願者向けのオープンキャンパスでは、教育に関心のある学生には「中学校教諭一種免許状(社会)」「高等学校教諭一種免許状(公民)」の教職課程があることを積極的に説明している。

現代社会学科の卒業要件単位(124単位)に加えて、卒業要件単位に含まれない教職科目の区分から免許種ごとに指定された単位数を取得することにより、「中学校教諭一種免許状(社会)」「高等学校教諭一種免許状(公民)」の取得を可能としている。教員免許状取得を大学の校訓「実学に勤め徳を養う」の趣旨を具現するものと位置付け、広範囲な授業科目や教育実習を修得して充実した学生生活を送ることができることを考慮し、教職課程の履修をすすめている。

入学後は、前期後期のオリエンテーションにおいて、年次ごと教員免許状取得までの科目履修方法を丁寧に示し、円滑に履修できるように配慮している。「教職履修カルテ」は、2年次前期に教員免許状取得の意向が固まった後、学期ごとに作成し、履修生は各自の学習成果を可視化するとともに課題を見つけその解決へと努めている。その際に、学生の適性や資質に応じた指導を行っている。

〔優れた取組〕

現代社会学科では、教科に関する専門知識と教科の指導法を一体的に学びながら、中等教育段階の生徒に対する理解と、学校現場を取り巻く社会的課題に対する認識を深め、教師に

求められる総合的な指導力を高めている。

学科専門科目の中には教職・教科に関連する授業科目も多く、社会科・公民科に関わる知識の幅を広げ且つ関心を深めることに役立っている。なかでも、「観光とまちづくり」等の専門科目では、地域の諸課題の解決と観光の視点からまちづくりに関わる事項を学び、また「世界遺産論」等により地域社会の歴史と地理、そこに生まれた文化を活かした主体的な取り組みについて学ぶことから、履修生各自の興味関心を引き出すことができるとともに社会科・公民科の指導法へとつながることができている。

教職課程では少人数教育の利点を活かし、学生一人ひとりの興味関心、適性に応じた学修支援・キャリア支援を学科全体の教員が協力しながら行っている。

〔改善の方向性・課題〕

現代社会学科では、3年次または4年次で「教育実習」を履修するためには、1年次、2年次に配当される卒業必修単位に加えて、卒業要件単位に含まれない教職科目の履修が必須となり、多くの履修科目数が必要である。

学生生活にふさわしい学びをするために本学では履修制限（キャップ制）を設けており、1年前期から1年間の修得単位の上限を見据えて専門科目と教職科目の配分を各人で計画できるよう促していく必要がある。また、2年次に教職科目が多く配置されていることから、1年次前期に「教育学概論」、後期に「教職入門」を配当するなどの履修上の改善を進めている。

少人数教育体制を活かして、教職を履修している先輩学生のアドバイスを取り入れるなど、教職履修者一人ひとりが円滑に教職科目を履修し、履修要件を達成した上で教育実習に臨み、教師への道へとつなげることが課題である。さらに、少人数授業においても協働学習や模擬授業などが活発に実施できる履修人数を確保し、そこからより多くの社会科・公民科教員を養成していくことを目指している。

＜根拠となる資料・データ等＞

【こども学部学校教育学科】

資料2：大学案内 2025

【こども学部こども学科】

資料2：大学案内 2025

【社会学部現代社会学科】

資料1：STUDENT HANDBOOK 2024年度

基準項目 2－2 教職へのキャリア支援

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

学校教育学科では、模擬教室を活用した教科指導法の取り組みや教員採用試験対策に向けての一人ひとりの資質を向上させる教職サポートセミナー、少人数で個々の悩みや進路決定の相談・支援をねらいとしたアドバイザー制度の充実を図っている。

学生の不安の原因である学習指導や学級経営の在り方を、実際の小学校教室を再現した模擬教室を利用することにより、現場での雰囲気の中で学習が進められている。「教職入門」や「教職実践演習」の授業を中心に、学級経営に有効な掲示物の在り方を考え実際に作成している。

また、教員採用試験に向けて学生一人ひとりの基礎的な力を計画的につけていくことをねらいとして、1年次より専門教員による国語力向上セミナー、英語力向上セミナー、数学力向上セミナー、論文や面接対策セミナーを実施している。

さらに、小学校で教壇に立つ卒業生による懇話会を実施し、在学中の学修や教員採用試験に向けた取り組み、教師の魅力や生活、児童や保護者の実態など具体的な内容を講話や座談を通して、在学生の教職に向けた意欲の向上を図っている。

〔優れた取組〕

学生にとって教育実習での経験が教職への大きな原動力になっている。そのため、教育実習直前に模擬教室を活用した全員の模擬授業を引き続き実施している。授業科目「教育実習指導」での学修をもとに、実際に45分間の授業を想定した学習指導案を作成し、ゼミ担当教員の指導や同級生などの助言を受けながら、具体的な授業を作り上げていくことが学生の不安解消に大きく寄与している。模擬授業では、板書計画を作成し実際にチョークで板書したり、黒板に貼る掲示物を文字の大きさや濃さなどを実際に現場で用いられている黒板に合わせて調整し作成したりすることも有効である。ICT機器を積極的に活用し、デジタル教科書や資料提示をする姿も見られるようになった。

また、3年次から本格的に実施される教員採用試験に向けた教職サポートセミナーでは、教員経験者や校長経験者による本学オリジナルのテキストを作成し、それをもとに論文作成や面接対策などを実施している。学生の確実な実力向上がなされていることが、高い教員採用試験合格率に示されている。

〔改善の方向性・課題〕

質の高い教育職員を養成することは本学科のねらいである。そのための充実した教職サポートセミナーのカリキュラムは確立しつつある。関係部署との連携を図りながら、教員採用試験や教職に向けて計画的に学修を進めていけるような時間割を工夫し、出席を促すなど丁寧な履修指導を継続することが課題である。また、課題改善に向けて検討し始めた教員採用試験の大学推薦枠受験への応募要件化を継続協議していく。

また、教育実習を終えると教職への意思が高くなる一方で、現場で児童や教員、保護者の様子、勤務状況などを知り、教職に就くことへの不安を訴える学生が増えることもある。引

き続き教師の魅力を伝え、教職の価値を理解させていく卒業生を招いた懇話会等を継続して実施するなど、教職へのキャリア支援体制の維持に努める。

【こども学部こども学科】

〔現状〕

キャリア支援については、学生・就職課と連携を密にしながら、こども学科では1年次から2年次に配置している「スタディナビゲーション」を始め、クラスやゼミでの個別面談等を通じて日常的・継続的に学生のキャリア支援に取り組んでいる。1年次の「スタディナビゲーション」においては、自分の生き方・働き方を設計するキャリアデザインについて考え、そのためには教職課程教育を含め、大学での4年間をいかに過ごすか4年間を見通してのタイムテーブルを作成している。「教職概論」「保育者論」等専門科目を通じて、教員や保育者の在り方、自身の適性について考える機会を設けている。

幼稚園・認定こども園との実習懇談会では、園の先生方から、実習期間だけでなく、ボランティアやアルバイトという形で日常的に幼児教育の現場に親しみ、教職の魅力を感じてほしいとの意見をいただいた。早い時期からの現場でのボランティアやインターンシップの機会を促進すべく、園と学科との情報共有を密に行うよう努めているところである。

実際の就職活動に当たっては、学生・就職課による支援とともに、小学校校長や幼稚園教員の実務経験を有する教員が、就職面接や小論文の指導に当たっている。

〔優れた取組〕

1・2年次はクラス、3・4年次はゼミとして少人数のクラスを編成しており、クラス、ゼミを担当するアドバイザー教員は毎週授業で担当学生と顔を合わせるほか、前期・後期に各2回の個別面談を実施しており、学生の教職への意識や適性を把握した上で個々のキャリア支援に当たっている。学生・就職課がキャリア支援の一環として実施している「自己整理シート」等も、アドバイザー教員との面談の中でその評価を振り返るなどより有効に活かしている。2年次の「スタディナビゲーション」においても、年に数回のキャリア形成演習の授業を設定してさまざまな職業観や社会規範の基礎に触れるとともに、学園祭でのイベント参加の推奨、親子のひろば「ぼっけ」での「くりすますのつどい」等の企画や運営への参加経験を通して、将来の幼稚園教諭としての実践的学びを支援している。また実習園からの求人、実習生に対する園からの就職の打診などを実習担当教員が学生・就職課や学生に仲介したり、ゼミの所属等を超えて小学校校長や幼稚園教員の経験のある学科教員が就職面接や小論文の指導に当たったりするなど、学生と教員の距離が近い小規模な学科ならではの支援を行っている。

〔改善の方向性・課題〕

幼稚園教諭としての就職率を高めるために、教職へのキャリア支援として学生の幼稚園教諭としての基礎的、実践的な資質・能力の修得や教員採用に向けた支援だけでなく、教職の魅力が伝わるための方法が求められる。第1には、園と学科との情報共有を密に行い、幼稚園におけるインターンシップを促すための仕組みを作り、学生自身がその魅力を体感する機

会を増やすことである。第2には職業としての幼稚園教育の魅力を伝える方法、機会について検討していくことである。実習園からは、実習以外にもボランティアやアルバイトといった形で日常的、継続的に幼児教育現場とかわり教職の魅力を感じてほしいとの申し出をいただいている。実習での学びとは異なるそれらの活動をどう位置付け、どのように学生の学びや経験につなげていくのかの検討が課題である。また就職して1～2年目の新人教諭、就職して数年の中堅教諭やベテランの幼稚園教諭を招いてのシンポジウムの実施については、引き続き課題として取り組んでいく。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

現代社会学科は、併設の浦和実業学園中学校・高等学校の協力を得て学校体験活動を実施している。教職サポートセミナーにおいて採用試験に向けて、学生一人ひとりの教科等の知識をつけていくことをねらいとした試験対策や論文対策を進めている。現代社会学科専任教員によるキャリア科目「ビジネスマナー」「サービス接遇演習」「キャリアデザイン」の授業は、社会人や組織人としての素養を身に付ける機会となっている。

〔優れた取組〕

現代社会学科では汎用性のあるキャリア教育を目指す学科の方針から学生たち全員が「スタディナビゲーション」や「卒業研究」を履修しており、担当教員によって職業への意欲や適性を把握する方策をとっている。

特に、教職に就こうとする学生に対しては教職担当教員だけでなく専任教員、教職サポートセミナー講師など複数の教員が学生一人ひとりについて情報共有に努めて支援体制を構築している

また、学内の施設である模擬教室を活用して、教育実習を意識した教育実践的な指導も行っている。

3年次以降は、埼玉県「彩の国かがやき教師塾」やさいたま市の教員採用についての説明会等に参加するなど、教師への道を積極的に開拓するよう促している。

〔改善の方向性・課題〕

キャリア意識に大きく影響する教育実習が実習生及び教育実習現場にとって実りあるものとなるよう、教育実習の振り返りから今後の改善点を見出し、即戦力となるべく、継続的な学びを実践できるようにキャリア支援を行っている。まずは、教職履修カルテを有効利用し、一人ひとりの学修成果を可視化するとともに、しっかりと課題と向き合いその克服に努め、「教職実践演習」において教職に就く者として仕上げをした上で、社会に送り出している。実践的な支援としては、教育実習前には集中演習方式で学習指導案等の作成のためのアドバイスを行っていく。

教員免許状の取得者を増やしていく工夫が求められると同時に、教職サポートセミナーへの参加を一層促進し、学修を深め、採用試験に対応する力をより確実なものにする必要がある。

＜根拠となる資料・データ等＞

【こども学部学校教育学科】

資料 17：教職サポートセミナー計画

資料 113：面接試験テキスト ー問題編ー

資料 114：論文試験テキスト

【こども学部こども学科】

資料 5－2：こども学科シラバス

【社会学部現代社会学科】

資料 1：STUDENT HANDBOOK 2024 年度

資料 107－4：学校体験活動記録

【教職に関する各種情報の提供（3 学科共通）】

学生が教職に就くための各種の情報の提供については、次のように行っている。

(1) こどもコミュニティセンターにおける関係資料・情報の提供

- ・学習指導要領及びその解説等の提供
- ・検定教科書の提供
- ・教員採用試験の募集関係資料の提供
- ・教員採用試験の説明会に関する情報の提供
- ・教員採用試験の試験問題関係の資料の提供
- ・教員採用試験に関する各種参考書の提供
- ・教職関係書籍、雑誌
- ・自治体の関係情報の提供

(2) 図書館における関係資料の提供

- ・教育の基礎的理解に関する書籍の提供
- ・教科等の教育に関する書籍の提供

＜根拠となる資料・データ等＞

資料 16：教職課程に必要な教材・教具（こどもコミュニティセンター・教務課保管）

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

【建学の精神を具現化する特色ある教職課程教育について（3 学科共通）】

教育職員免許法施行規則等に基づくとともに、各学科のカリキュラム・ポリシーに従い、教育課程を編成している。授業科目の構成、卒業要件や必要単位数を把握し、基礎から順次ゆとりを持って履修できるようにキャップ制を実施している。また、学科専門科目と教職科目が有機的・系統的に学修できるように配置するとともに、実践的指導力を育てるために体験活動（インターンシップ、学校体験活動、ボランティア）を経て教育実習に臨むよう設定している。関連する科目については、教職課程コアカリキュラムを踏まえた教育となるよう計画するとともに、ICT 機器の活用やアクティブラーニングの工夫については、シラバスに記載し、教育活動に具体化するようにしている。4 年次に履修する「教職実践演習」において学修の振り返りを行った後、教員免許状を取得し教員として送り出すことにより、建学の精神である「実学に勤め徳を養う」を具現すべく教職課程教育を行っている。

＜根拠となる資料・データ等＞

資料 4-1：学校教育学科教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

資料 4-2：こども学科教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

資料 4-3：現代社会学科（中免・高免）教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

教育課程については、基礎的教養を学ぶための「人間総合科目」、こども理解を包括的に学ぶ「こども総合科目」、専門分野について総合的に理解するための「教育専門科目」に大別し、編成している。

また、「スタディナビゲーション」を 1・2 年次にわたって展開し、大学生としての学びの技術、学修の姿勢と意欲を形成している。さらに、将来を意識したキャリア教育の授業科目を 2 年次から体系的に配置し、インターンシップや教育実習などに関連付けながら、社会人としての基礎的な能力と実践力を高めている。加えて、今日的な学校教育の課題に対応することをねらいとして、「学校教育の現代的課題」「こどもの安全と危機管理」「教育の方法と技術（ICT の活用を含む）」では、実務経験のある教員が具体例を積極的に織り込み授業を進めている。

これらの授業を履修することにより、小学校教諭一種免許状を取得することができる教育課程になっている。また、小学校教諭一種免許状取得を前提に他学科で必要な単位を取得することにより、幼稚園教諭（一種または二種）免許状、または中学校教諭（一種または二種）免許状（社会）を取得することができる。

〔優れた取組〕

小学校教諭免許状を取得するため、1年次より計画的に履修できるようカリキュラムの編成を工夫している。なかでも教師としてその根幹である児童との関わり方については、本学科の最も大切にしている内容である。近隣の小学校と連携し、1年次では「教育インターンシップA（必修）」において、定期的に児童の放課後や土曜日の学習や遊びの支援を行っている。また2年次からは、さいたま市教育委員会、埼玉県教育委員会と連携し、「さいたま教育コラボレーション構想」「彩の国 かがやき教師塾」への応募をすすめ、アシスタントティーチャーとして教員の補助・支援活動を行い、学校での体験を通して児童との関わりについて学んでいる。

さらに、各教科指導法では、学習指導要領に基づき、主体的・対話的で深い学びやアクティブラーニングを取り入れた授業の在り方について、模擬授業を通して身に付けている。これらの活動を通して、児童との関わり方や学年による行動や考え方の実態を教育実習に生かすことができ、実習が実りあるものになっている。また、「こども理解と観察（必修）」では、こどもの観察を行い、発達の過程を理解することにより、小学校教諭としての幅を広げることをねらいとしている。

これらの学びを、電子化された教職履修カルテに記録し、教職に対する効果的な学びに活用している。

〔改善の方向性・課題〕

小学校教諭免許状を取得するための授業は計画的に設定されているものの、時間割上2年次後期に必修授業が集中する傾向となっている。そのため、課題作成や提出に追われ、じっくりと教材研究をし、教材の本質や授業の効果的な進め方を検討する時間が十分とれないことも考えられる。また、「教育インターンシップ」についても、教職に関わる授業科目や興味がある授業科目と重なることがある。さらに、幼稚園教諭や中学校教諭免許状取得のため、他学科の授業科目を履修する際に、学科の授業と重なることもある。教育実習においても他学科の動向との調整が必要である。以上のような本学科教育課程をより円滑に運営するために義務教育特例及び学科間共通開設に向けた改善方法を継続して検討していくことが課題である。

さらに、本学における全学的なカリキュラム改訂の動向等に注視しながら、「心理」や「情報」などの副専攻を活かし、データサイエンスパスポートなどを取得した「GIGA スクール」を担う力量を兼ね備えた小学校教諭などの養成の実現にむけた検討を始めたい。そのために、総合学科や専門学科を有する高校との連携強化および県外高校生や多様な学習歴を有する高校生の受け入れ体制・制度の強化を関係部署と連携しながら構築することが課題である。同時に、多様な学習歴を有する入学生が、教職の魅力を実感し豊かに分かち伝える機会として、教職サポートセミナーとの連携・強化に取り組む。

【こども学部こども学科】

〔現状〕

本学科では、幼稚園教諭免許の取得と同時に保育士の資格も取得が可能となっている。カリキュラムとしては、主に保育士資格に関わる科目は1・2年次、主に幼稚園教諭免許に関わる科目は2・3年次に配当されている。

これにより、1年次から段階的に、各領域の視点で見るこどもの育ちの姿や、その学びを促す指導について、指導計画の作成や模擬実習を含む学修をした上で、幼児教育の実習に臨む体制が整えられている。学生にとっては、こどもの生活の場での実践を経験することで、それまでの学修内容を検証したり、実践の中で理解をより深めたりすることができる体制である。

本学では、2年次2月の実習を終えた後の3年次前期以降、「教育の基礎的理解に関する科目」の「カリキュラム論」と「領域に関する専門的事項」の各科目を開講している。学生は3年次の終わりまでに更に保育現場での実習を経験した上で、3年次2月に、「幼稚園教育実習Ⅰ（基礎）」を履修することになる。

このように、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」に属する科目と「領域に関する専門的事項」に属する科目を段階的に学びながら、幼児教育現場での実習を行うことで、理論と実践の往還を経験し、保育内容や幼児理解、指導計画等について一定の学修を積むことのできる、教員養成にふさわしいカリキュラムとなっている。学生はこれらの学びを経た上で、3年次の2月にはじめての幼稚園教育実習に臨む。

さらに、4年間で最後の実習となる4年次6月の「幼稚園教育実習Ⅱ（応用）」では、「幼稚園教育実習Ⅰ（基礎）」での経験も踏まえたそれまでの学びを活かし、将来幼児教育の現場で働く具体的なイメージを持ちながら、幼児への深い理解、保育の展開、保育者との協働等を経験し、4年次後期の「保育・教職実践演習（幼稚園）」に至るという流れになっている。

〔優れた取組〕

こども学科では、2年次に卒業に必要な科目として「こどもの表現と創造性」、幼稚園教諭選択科目として「自然観察」の科目を配置している。それぞれ、芸術、理科教育を専門とする教員が担当し、こどもの創造的行為への肯定的な評価や、自然現象を捉える基礎的な方法を、ワークショップや調査など、具体的な体験を通じて教授することで、保育の実践的な技術を支える基礎的な素養を培っている。

また、幼稚園教諭・保育士資格の必修科目である「特別支援保育」の外に、こども専門科目の2年次から4年次までを対象とする選択科目として「発達臨床心理学」「多文化と保育」を配置し、近年教育現場において対応が求められている障害児など特別な配慮が必要とする幼児や、外国にルーツを持つ幼児の実践的な理解について学ぶ機会を設けている。

さらに、2022年度に、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の5領域と「保育内容総論」を担当する教員が教職課程のコアカリキュラムの内容を確認した上で、各授業の開講時期に応じた指導内容や指導方法、ICTの活用等をどのように進めているのかについて、意見交換を行った。その中で、本学の指導案書式も、指導の意図が伝わるように見直しを行った結果、「保育内容総論」と各領域の「保育内容の指導法」の担当教員も、自分の

授業で何をどこまで行うべきかの意識を持って指導に臨めるようになった。2023 年 3 月には、2022 年 8 月の協議を踏まえた実践の報告を行い、より具体的に互いの授業展開や補助教材等の工夫を共有する機会となった。

〔改善の方向性・課題〕

ディプロマ・ポリシーで述べられている、こどもに関する専門的知識や現代社会に対応した情報リテラシーの修得、こどもの最善の利益を尊重する視点、こどもの表現を感受できる自由な心、こどもたちと信頼関係を育む態度、こどもの文化への基礎的知識、実践に役立つ技能・技術、家族・地域社会・現代社会とこどもの関係への理解等については、教職課程カリキュラム及び教職課程以外の学部・学科の授業科目において学びを図っているところである。

一方で、各科目の開講時期や、教授内容の連関性をより意識した授業展開をすることができるよう、取り組みを進めることによって、全教育課程を通じたより効果的な学修が見込まれる。各教員が担当科目とつながりのある科目の授業内容を理解すると同時に、学生に科目間の連関性が伝わるような教育課程の提示や主体的な履修を促すための履修指導を行う為にも、カリキュラムツリーの作成や教職履修カルテの見直しと改善を継続していくことが課題である。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

教育職員免許法施行規則等に基づき教育課程を編成していることから「教科に関する科目」においては、学科の特性を活かした専門科目が盛り込まれ、社会科・公民科の知識を豊かに且つ深く掘り下げて学ぶ授業科目となっている。

また、「教育の基礎理解に関する科目」には、現代社会の課題に対応して「学校安全と危機管理」や「学校と地域連携」などの授業科目を配置し、実践的で充実した内容となっている。

担当教員は、授業内容が教職課程のコアカリキュラムに対応し適切なものになっているかを確認するとともに、必要に応じて ICT の活用等をシラバスに明記し、授業が実りあるものとなるように努めている。3 年次で履修する「教育実習」に関しては、2 年次末までに「学校体験活動」を修了していることや規定の単位を修得していることを履修要件として定めている。

〔優れた取組〕

教職科目については卒業要件単位に含まれないものが多いが、1 年次より計画的に履修できるようにカリキュラムを編成している。教職科目における「教科に関する科目」は、現代社会学科の専門科目との関連が深く、社会科や公民科に関する知識の幅をさらに広げる専門科目や現代社会の課題について深く掘り下げる専門科目を 1 年次より順次履修できるように配置している。

本学科では、1・2年次に「スタディナビゲーション」を必修科目として配置し、アクティブラーニングやグループワークを学科の学生全員に課し、教職において必要とされるアクティブラーニングの手法や ICT 教育技術に資するものとなっている。

〔改善の方向性・課題〕

教育実習を実りのあるものにするため弾力的な履修要件を設けるなどカリキュラム編成上の工夫はなされつつあるが、授業運営や学級経営に関する実践的指導力を強化するしくみが必要である。

授業展開で求められる指導法修得については、教科教育法での取り組みや事前指導の充実とともに学内での学びだけでなく、学外での教育活動体験の取り組みを増やしていく必要がある。現在実施している「学校体験活動」に加え近隣中学での学校ボランティア等の実施や学校行事への協力のほか、授業見学および現職教員との意見交換の実施など、実践的指導力育成に引き続き取り組む。

さらに、カリキュラム上での専門科目と教職科目の関連性や協力体制を充実させる。専門科目の学びが教職科目において、また教職科目の学びが専門科目の学びを豊かなものにしていくための方策を学科教員全員で検討していくことが課題である。

【教職課程シラバスにおける学修内容や評価方法等について（3 学科共通）】

教職課程シラバスについては、課程認定の際の教育内容を継承し、規定の様式で作成後シラバスチェックを行っている。該当する科目については、コアカリキュラムとの対照表を作成し趣旨を踏まえた教育内容を設定している。ICT 機器の活用については、シラバスに記載し、授業における活用能力の基礎を身に付けるようにしている。また、各科目の学修内容や評価方法等を学生に明示することにより学修成果を確実なものにするよう努めている。学期末には、授業アンケート等を踏まえ、授業内容や評価方法が学生の学びを促し適切な指針となりえたかについて振り返りを行い授業改善につなげている。

<根拠となる資料・データ等>

【こども学部学校教育学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

【こども学部こども学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

【社会学部現代社会学科】

資料 1 : STUDENT HANDBOOK 2024 年度

資料 4 - 3 : 現代社会学科（中免・高免）教職課程設置時の目標と計画（教職課程認定申請書抜粋）

基準項目 3－2 実践的指導力育成と地域との連携

【こども学部学校教育学科】

〔現状〕

教科等の指導法は、小学校の全教科等について授業科目を設置している。そこでは、学習指導案の作成や模擬授業の実施、教材作成や教材研究など、実践力の育成に力を入れている。特に模擬授業では、学生全員が教師役となり、実際の授業での展開方法や児童への支援、板書やノート指導など、具体的な場面を想定し学んでいる。これらの実践をもとに、教育実習直前には、全員が 45 分間の模擬授業を実施し、その後研究協議会を設け、具体的実践をもとによりよい授業に向けた指導を行っている。

「教育インターンシップ A」では、近隣の小学校に出向き、放課後や土曜日に学習や活動支援を行うチャレンジスクール参加を必修としている。そこでは、地域のスタッフと学生が協力して、児童の宿題や理解が不十分な内容について、個々に指導を行っている。年度初めは戸惑っている学生も、回数を重ねるにつれ児童の実態に合わせて分かりやすく言葉をかけ、助言を工夫する姿が見られるようになる。これらの活動に対し、担当教員の巡回指導や学期末に行う活動の振り返りの授業を通して、より実践的な指導力が育成されるよう取り組みを地域と連携し継続して進めている。

〔優れた取組〕

学校教育学科では、実践的な指導力の育成に加え、地域との協働に重きを置いている。その中の一つは、チャレンジスクール活動でありアシスタントティーチャーである。チャレンジスクール活動では地域のスタッフとともに 1 年次より児童と接する活動を行い、こどもへの声掛けや接し方、距離感の把握を学修する。例えば学習指導でも、ただ計算の仕方を教えるのではなく、その仕組みや求答の要領なども丁寧に教えなければ伝わらないことを実感する。この経験が教科指導法の授業に役立ち、教科指導法で身に付けた内容をこどもたちに返すという好循環になっている。

また、学習指導要領に基づく実践的指導力の向上を図るとともに、GIGA スクールに対応すべく小学校現場で実際使用されているデジタル教科書やコミュニケーションツール、学習支援ソフト等の紹介や使用方法についても学ぶ機会を提供している。

「1 日大学生」という公開講座では、市内外の小学生対象に、学生とともに興味関心を高める授業を実施している。「海のいきものを知ろう！」をテーマに小学校の授業ではなかなか取り組むことができない観察や作品制作を行い、保護者にも評価が高い。また、児童への支援だけではなく、観察の仕方や要領を工夫したり、児童の興味関心が高まる内容や実施方法、使用教材などを何回も検討を重ねたりするなど、実践的指導力を身に付けている。

さらに、近隣の小学校で実施される「徒歩遠足」の引率補助活動も実施している。本学科の学生が教員や保護者、地域の方と活動し、児童の安全を見守ったり、交差点で交通整理をしたり支援をしている。これらの活動は、地域との連携を深めることに加え、教師として危機管理や安全管理意識を身に付けるのに大きく寄与している。

〔改善の方向性・課題〕

学科開設以来の活動を通し、地域との連携が強化されている。定期的な小学校との交流活動に加え、地域の小学校の行事に協力する機会も増えてきた。

一方で、教育インターンシップで学生が主催する理科実験や工作などの活動を企画・検討する時間が思うように取れない場合もあり、活動内容の質の担保が課題である。また、学生の授業日との兼ね合いで地域スタッフとの連絡調整が思うように進まないこともある。地域関連の事業は、主に土日を中心とした活動になり、参加学生の確保も課題になる。教育インターンシップ開設時間と方法の再検討など、効果的な活動に向けた具体的手続や関係部署との連携を図るとともに、近隣小学校の行事など地域行事への参加や「1日大学生」など埼玉県事業との連携強化を検討する。また、これらの活動への参加をどのように教育実習に生かすかまたは生かしたかを振り返り、より充実したものにすることを引き続き検討する。

【こども学部こども学科】

〔現状〕

こども学部では、家族支援や地域支援について学ぶ機会として、学内に親子のひろば「ぽっけ」を開設して実践的学びを提供している。こども学科では、ディプロマ・ポリシーに掲げられた「保育、福祉、幼児教育の実践において役立つ多様な技能・技術を身に付け、それをこどもたちへの関わりに活かせるよう実践的学修を積んでいること」「家族、地域社会、そして現代社会との関係で、こどもを理解する視点を養い、幅広い人々の参加を促しながら地域社会の創造を促す重要性と、そのための実践の在り方について考え、判断し、基礎的なことがらを理解しようとしていること」に基づき、実践的指導力の育成と、地域との連携についての学びを理論・実践の両方から進めている。学生は「ぽっけ」において、直接こどもと関わる体験を通して具体的な発達の様相や個性を理解すると共に、乳幼児や保護者、保育スタッフとの関わりから共感的人間理解と観察力を育んでいる。

また、学外活動としては、大学近隣地域の祭りやスポーツイベント等への学生の積極的な参加を促し、こどもたちが楽しめるコーナーの運営などを通して、実践的な学びができるようにしている。

〔優れた取組〕

親子のひろば「ぽっけ」での体験を記録する為に、「活動の記録」として、参加日と、体験を通した学びを記録する用紙をファイルしてきた。学生の「ぽっけ」での体験への意欲向上を図り、2023年度中に記録用紙の見直しを行い、2024年度から運用を開始している。記録は負担感を軽減するため、テーマを選択制にし、記録の分量を減らすと同時に、専門スタッフや教員と振り返りをして得られたコメントを記載できるようにした。更に、参加回数の積み重ねを楽しめる工夫として、双六様の枠にシールを貼っていく書式に変更した。

1年次の「スタディナビゲーションA」、「スタディナビゲーションB」の授業で、クラスごとに学生が「ぽっけ」に参加する機会を設け、自主的に参加につなげられるよう工夫している。

また、学外において実践的指導力を育むフィールドの拡大を検討する為に、実習等で交流

のある幼稚園や保育所等との対話を進めている。本学の拡大教員養成協議会や、さいたま市私立保育園協会との懇談会等での協議を踏まえて、幼児教育のフィールドでの経験を積む機会を設けていく準備を進めている。

学生の現場体験を主体的な幼児教育のフィールドへとつなげていくことについて検討するための予備的な調査として、2024 年度に、2～4 年生を対象としたアンケートを実施した。この調査の結果から、こども学科における現場体験である「フィールド体験」や各種実習がきっかけとなって幼児教育・保育現場でのアルバイトやボランティア活動へつながったという姿を確認することができた。

〔改善の方向性・課題〕

「ぽっけ」では、学生の参加への意欲向上のための取り組みをしているものの、学生が時間割上参加することが難しい場合も見られる。そのため、参加の機会の拡大という量的な課題に向けては、開室日時と時間割の調整が必要である。また、質的な課題として、これまでに学生が書いた記録内容を分析する等、体験を実践的指導力の育成につなげていくための検討を進める方針である。

実習以外の学外での現場体験の機会を確保していくため、アルバイトやボランティア等を担当する学生・就職課と連携しながら、実習園と実習担当教員との直接的な関わりを学生の学外活動の推進に活かしていくことが考えられる。その際の調整方法や、学生の体験内容の把握、実践的指導力の育成につなげていく仕組み作りの検討が課題である。

【社会学部現代社会学科】

〔現状〕

現代社会学科では、教育実習の履修要件として、併設の浦和実業学園中学校・高等学校で2 年次に「学校体験活動」を課している。2 日間ではあるが学校行事・文化祭の手伝いを通して、学校現場をよく見聞きし生徒と関わる中で実践的指導力を体得するよい機会となっている。

地域連携については、授業科目「学校と地域連携」の中で地域連携の必要性を学ぶと同時に、実際に地域連携の活動を取り入れた授業を開発しつつある。

1 年次に「スタディナビゲーション」の中で埼玉県選挙管理委員会・さいたま選挙カレッジによる出前講座「選挙啓発講座」を行っている。授業の中で「模擬投票」を経験することは、教員を志望する学生にとっては、中学校、高等学校の社会科・公民科の授業で活用できる経験であり、自らが受講生として経験したことを、教師として、授業に活かす貴重な資源ととらえることができる。また全学共通科目の「キャリアインターンシップ」では、団体・企業へのインターンシップ参加を通じて、実社会を経験する機会を提供している。

〔優れた取組〕

併設の浦和実業学園中学校・高等学校と連携している「学校体験活動」については、学校・大学間での事前打ち合わせや履修生の事前・事後指導を行うことにより、双方に実りある体験活動となっている。こうした学外実習の際には、全学組織であるこどもコミュニティセン

ター職員のきめ細かい支援により円滑な取り組みができている。

こどもコミュニティセンターには、中学校で社会科教員及び校長経験のある講師を配置し、学修支援に携わるとともに近隣中学校との連携も進めている。

また、埼玉県選挙管理委員会・さいたま選挙カレッジの出前講座と連携して講座運営を行っており、教職課程の履修生がそこでリーダーシップを取って関わることにより、社会科・公民科の授業で活用できる実践的指導力を身に付ける機会となっている。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程では、履修生を教育実習に送り出すまでにある程度の実践的指導力の育成が求められる。授業科目の中に「模擬授業」等をしっかりと位置づけ、指導案作成と模擬授業を繰り返し行うなどして自信をもって授業運営に臨めるように指導するとともに、実習中の課題を実習後に解決していけるように教員が連携し事後指導を行う必要がある。「教職履修カルテ」を活かして学修の課題解決を図り、最終的には「教職実践演習」で仕上げを行っている。

地域連携については、2023 年度には近隣の中学校との交流を開始した。拡大教員養成協議会等で交流の始まった近隣の中学校で、学生がボランティアとして定期的に活動することからはじめ、組織的に連携を深めていくことが課題である。

＜根拠となる資料・データ等＞

【こども学部学校教育学科】

資料 14: 教育実習・教育インターンシップ・介護等体験・学校体験活動実施状況

【こども学部こども学科】

資料 18 : 「アルバイトやボランティアに関するアンケート」の結果概要

資料 19 : ぽっけファイル

Ⅲ 総合評価(全体を通じた自己評価)

＜こども学部学校教育学科＞

小学校教諭免許状取得に向けて、教育内容面と環境・施設面の両面から充実した教職課程の運営を行っている。本学科では、1年次より様々な機会と授業を通してこどもとの関わりを重視し、それにより「様々な場面でスムーズに児童と関わる事ができた」という感想が多く寄せられている。

また、小学校の模擬教室を利用した指導法の研究と模擬授業の実施は本学科の大きな特徴である。通常授業での使用の他、教科指導のスキルアップのため、学生が自由に自主的に使用する姿を数多く見受ける。さらに、開設8年目を迎え、教職サポートセミナー等の支援体制、教育委員会や地域との連携が毎年充実してきている。2025年度の教員採用試験は受験者全員が合格という結果からも、本学科の教職課程の運営が充実していることの根拠となろう。学生定員確保に向けた取り組みを充実させ、教育現場に数多くの卒業生を輩出するよう引き続き努めていく。

＜こども学部こども学科＞

学内に親子のひろば「ぽっけ」を開設し、学生が授業や自主的な参加を通して乳幼児の発達や保護者支援、乳幼児教育の実践を実践的に学べる環境を整えている。専門科目では保育内容の理解、指導法、保育技能に関する授業科目を充実させ、少人数での模擬保育やロールプレイを活用した授業を展開している。これらの指導は実務経験を有する教員が担当することによって、より実践的な学修となるよう配慮している。保育内容の専門科目にとどまらず、芸術や理科教育を専門とする教員が「人間総合科目」「こども総合科目」として開講している「こどもの表現と創造性」「美と表現」「ストリートダンス」「自然観察」等の受講を通して、幅広く、豊かな幼児教育を展開するための基礎的な素養を培っている。

また「スタディナビゲーション」やキャリア関連科目を通じて職業人、社会人としての心構えや素養を醸成すると同時に、幼稚園教諭へのキャリア支援に取り組むことによって、学生が教職に魅力を感じ、幼稚園教諭への夢を実現できるよう、学内の関係各部署と連携し、幼児教育に貢献できる人材、豊かな幼児教育実践を展開できる幼稚園教諭の育成に努めている。

＜社会学部現代社会学科＞

中学校教諭一種免許状(社会科)、高等学校教諭一種免許状(公民)取得に向けて、現代社会学科の専門科目を基盤とし、特に、教職科目の特質である教科教育の指導内容・方法面とICT教育環境面の教育技術に関わる両面から充実した教職課程の運営を行っている。学科の専門科目は、中学校社会科、高等学校公民科の学修内容を専門的な見地から深化させることができる。

また、学校で必要とされる調査・統計に関わる基礎力を身に付ける機会としては、社会調査の集計分析等を学ぶ場を用意している。

2024年度は、学科開設5年目にあたり、教職に向けた取り組みは、学科会議で毎月報告審議しており、専任教員全員で連携し、教職を目指す学生全員のサポートをしている。

また、実習を終えた学生が、教職科目担当の教員とともに中学校の教壇に立った経験を活かして学び合う時間を設ける等の学生同士の支えあいの機会も設けている。免許状を取得し、現代社会学科の卒業生としてより多くの学生を教員として輩出できるように、学科全教員が協力して、教職を担うべき学生の育成に努めている。

＜大学の教職課程全体＞

浦和大学では、大学及び学部・学科ごとに3つのポリシーを定めるとともに、大学と各学科における教員養成の目標と計画を作成し、教職課程を編成・実施している。

基準領域1については、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づき育成を目指す教師像やカリキュラムを学生に周知するとともに、それらが教職員に共有され教職課程教育が計画的に進められている。教職課程の運営については、全学組織である教員養成協議会において課題の検討や調整、教職課程の質の向上に向けた自己点検・評価を実施している。また、教育実習や教育インターシップ等の支援、教職に関わる各種資料の提供等は、こどもコミュニティセンターが担当している。

基準領域2については、各学科のアドミッション・ポリシーに基づいて学生の募集や選考が行われ、大学生としての基礎的素養を培う授業科目「スタディナビゲーション」等を通じて、教職課程における学びの意義等について周知している。キャリア支援については、こどもコミュニティセンターにおいて、教職関係の資料や情報を提供、また、教員採用試験に向けた教職サポートセミナーを計画的に実施している。

基準領域3については、各学科の目標達成に向けた専門課程と教職課程とを関連付けながら、学科の特色を反映した教職課程教育を進めている。ICTの活用やアクティブラーニングについては、シラバスに明記し、授業への具体化を図っている。また、教育実習を履修するための条件を定めるとともに、事前指導を行い必要な実践的指導力の確保に努めている。地域との連携については、近隣の学校における「教育インターンシップ」やボランティア活動が定着している。

なお、教育委員会関係者、地域における複数の幼稚園・認定こども園の園長、小・中・高等学校の校長と各学科の教職課程担当教員等が、教育現場の状況や教員養成の課題について協議する拡大教員養成協議会を、2023年、2024年に開催した。教職に就くまでに身に付けるべき知識・技能や姿勢等について協議を深めることができた。

以上、本学では各学科及び全学組織である教員養成協議会、こどもコミュニティセンター、教務課などが相互に連携しながら、教職課程の運営と改善に向けた取り組みを進めてきた。改善に向けた課題として次の3点をあげる。

第1に、大学の教職課程全体として、教職課程の運営改善と質の向上に向けた取り組みをさらに充実する。そのために、各学科の特色や経験を生かしながら、3学科の一層の連携を深めた課程運営を進め、実践的な指導力の育成やキャリア支援の取り組みの充実を図る。また、教職課程の学科間共通開設や義務教育特例を活用した教職課程の改善充実の在り方について検討を進める。

第2に、学校現場の状況や教員養成・採用に関わる動向を把握しながら、必要とされる実践的指導力の育成に向けた取り組みを進める。特に ICT を活用した教育については、必要とされる知識や技能の向上に向けた取り組みの一層の充実を図る。

第3に、職業としての教育職の意義や働きがい、専門職性等についてさらに理解を深め、教職志願者の増加と定着を促し、進路希望の実現に向けたキャリア支援を充実する。そのため教職へ理解を促進する機会の充実、学習意欲の醸成とともに、教員採用試験に向けた学習支援の充実を図る。

IV 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

本報告書は、2023、2024 年度の教職課程自己点検・評価の結果をとりまとめたものである。報告書作成のプロセスは次のとおりである。

教員養成に関わる全学組織である教員養成協議会において、教職課程自己点検・評価及び報告書の作成・とりまとめを担当することとし、2023 年度・2024 年度計 8 回の協議会を開催し、報告書の作成を進めた。また、教員養成協議会の下に、教職課程自己点検・評価専門部会を設け、専門的事項の検討及び報告書案の作成を行った（2024 年度 1 回の開催）。さらに、教職課程自己点検・評価の報告書の構成、作成スケジュールの調整、学外における関係情報の収集整理等を行うため、教職課程自己点検・評価企画調整会議を設け、諸準備と調整に当たった（2023 年度・2024 年度計 4 回の開催）。

- 1 2022 度末にとりまとめた教職課程自己点検・評価の結果を踏まえた、今後の改善に向けた取り組みについての検討（教員養成協議会、2023 年 5 月、7 月、10 月）。
具体的には、基準項目ごとの課題を踏まえた今後の取り組み及びその具体化の在り方について検討を行った。
- 2 「1」の改善に向けた取り組みを踏まえた、2023 年度の取り組み状況の確認（教員養成協議会、2024 年 3 月）
- 3 2024 年度実施の教職課程自己点検・評価及び報告書の作成のスケジュール等の確認（教員養成協議会、2024 年 3 月、4 月）
- 4 2024 年度実施の教職課程自己点検・評価の実施方針、実施体制、報告書の様式及び作成要領の確認（教員養成協議会、2024 年 8 月）
- 5 2022 年度教職課程自己点検・評価の結果を踏まえた取り組みの現状と課題に関する報告と協議（教員養成協議会、2024 年 11 月）
- 6 2024 年度教職課程自己点検・評価報告書案の審議（教職課程自己点検・評価専門部会、2025 年 1 月）
- 7 2024 年度教職課程自己点検・評価報告書案の審議（教員養成協議会、2025 年 2 月）
- 8 2024 年度教職課程自己点検・評価報告書の承認と公表手続き（部局長協議会、教授会、2025 年 3 月、学長による承認と決定）

浦和大学
教職課程 自己点検・評価報告書
令和 6（2024）年度

令和 7 年 3 月 31 日発行

発行	浦和大学
	〒336-0974 埼玉県さいたま市緑区大崎 3551
TEL	048-878-3741（代表）
HP	http://www.urawa.ac.jp
